

第1章. 現象に直接向き合う思考の仕方こそ

私が長い間身を置いた機械の設計、生産、運転操業といった仕事環境は、科学や工学の考え方が支配的な世界だった。数学、物理学、化学、機械工学、電気・電子工学、情報工学といったものが、思考と判断の主軸を成していた。

多くの事柄は科学的に、論理的に構成され、説明されていた。製品や生産に関わる領域では、こうした思考と判断による説明がほとんどのことに通用した。科学的原理や法則、工学的に客体化・客観化された法則が大多数のケースに絶対的な説得力を持っていたからだ。

しかし、人間の心や感情が絡む事柄が無い訳ではない。これには科学的原理や法則、工学的に見出された法則による説得は通用しない。営業活動やクレーム対応には、こうした説得が通用しないことが多い。会社や相手担当者に対する好き嫌いが前面に出てきたり、いま困っている事柄を解消することへの欲望が強過ぎて、理屈や論理を受け入れる姿勢を封印してしまったりするからだ。

そんな状況下にあっても、多くの技術者たちは問題を解決しようとする時、原理や法則に基づいて論理的説明をしようとする。一般的傾向として、多くの人たちはこれで解決できると思っているが、先述したような理由で問題がこじれることが多い。

「非の打ち所がないのに受注できなかった」とか、「説明は完璧なのにクレームの收拾ができない」といったことがよくある。それはこうした理由によるものだ。

人間の心や感情が絡む事柄に対応する際に、力を発揮する人たちがいる。顧客との交渉を得意とする人たちで、営業マンに多く見られるタイプの人たちだ。彼らは、商品やサービスの説明よりも、それに対して相手がどう感じているかを把握することに努め、相手の心に自分たちへの好感を生み出すことに力を注ぐ。製品やサービスの技術に関する詳細な説明に長けていないこうした人たちが、困難だった受注活動やクレーム対応を成功させる上で大きな力になることは多い。

こうした現実を踏まえ、腰を据えて考えなければならないことがある、と私は気付いた。「本当のこととは一体どういうことなのか」という問い掛けと、それに対する解答だ。科学的原理や法則、工学的に客体化・客観化された法則といったものから捉えたことは、必ずしも本当のことを示しているとは言えそうもない。同様に、関係する人たちが口にする言葉や行動から察知できることも、必ずしも本当のことを示しているとは言えそうもない。

本当のことは、この両方を統合して見えてくる何らかのものの中にあるのではないか、

という考えが浮き沈みするようになった。いや、この2つ以外にも統合の対象に加えなければならないものもあるのではないかと、という考えも浮かんできた。

こうしたことに対する考えを深める上で大きな力になったのが、現象学とユング心理学だった。単純に言ってしまえば、次の2つの原則を踏まえて考えようと思ったのだ。

- ・一切の先入見から離れて事象そのものに向き合うこと
- ・人間の行動は無意識に支配されているものが圧倒的に多いこと

科学的原理や法則、工学的に客体化・客観化された法則を一旦傍に置いて、目の前にある物や目の前で起こっている現象に直接向き合う、ということを徹底的に考えてみた。また、私たちにとってこれまで優位にあると思われてきた思考の仕方を、現象に直接向き合うという視点から見直してみることにした。

私たちを取り巻いているのは現象だ。多くの現象群で構成される環境の中で私たちは人間は生きている。そして、人間はそれらの現象を知覚して世界を認識する。世界には様々な物体も存在しているが、物体が認識されるのは何らかの現象を通してだ。私たちが生きる世界は現象群から成っている。

こうした現象が私たちの周りには数多く発生している。私たちはその現象を知覚してそこに何があるのか、いま何が起こっているのかを見出そうとする。そのために多くの解釈の枠組みを持っているというのが一般的だ。その中には学校などで学んだ学問が提供する枠組みもあれば、社会の中での活動を通して身に付けた常識や判断基準といったものが織りなす枠組みもある。

こうした解釈の枠組みがあるからこそ、私たちは身の回りに起こることに対して、何らかの認識と判断の下に行動を起こすことができる。その認識と判断や行動は適切なこともあればそうでないこともある。こうした適不適が発生する理由は次のように考えることができる。

私たちが身につけている解釈の枠組みとは、ある条件が揃った時に適切な認識と判断を提供してくれるものだ。条件が揃わなければ、認識できなかったり、誤った判断をしたりするのだ。科学の原理や工学の法則にしろ、社会の中で身に付けた常識や判断基準にしろ同じことが言える。

原理や法則が示しているのは、然るべき条件が揃えばその反応や現象を起こすことができるということだ。従って、原理や法則の妥当性を確認するために第三者による検証実験が行われる。

ところが、私たちが生きている現場は科学や工学の研究の場とは違う。条件が綿密に設定される研究とは違い、多くの現象に溢れている。認識から洩れる現象もあれば、知覚さえされない現象もある。こうした環境の下で原理や法則という解釈の枠組みだけに頼って、いま何が起きているかを認識しようとするれば、その結果が不適切である可能性はかなりある。

一般常識という解釈の枠組みも同じだ。科学や工学の研究とは違い条件が設定されているわけではないから、曖昧な状況の下では妥当な認識を引き出してくれる可能性もある。しかし、条件が曖昧だということは、何が起きているかを判断しようとしている今、その枠組みを使うのが妥当であるとの確信も曖昧だということである。

思考というものに対してこうした見方を重ねていくと、その視線の向こうに浮かび上がってくるものがある。それが前に紹介した現象学の基本姿勢だ。即ち、「一切の先入見から離れて事象そのものに向き合うこと」だ。

この基本姿勢を持つことは、目の前にある現象に対して謙虚になることでもある。何らかの枠組みを持つと、目の前にある現象を取捨選択してしまう。自分の持つ枠組みに合いそうもない現象や不都合な現象を、例外とか雑音として排除してしまうのだ。

何かの法則を追求するために多くのデータを集めて回帰分析をしようとする際、極端に外れたデータを排除することが一般的に行われている。このやり方が妥当な場合は多々ある。しかし、極端に外れたデータが現れたのは何故かを追求して意外な真理に到達した事例も多い。現象に対して謙虚になり、全ての現象に意味があると受け止め、一つ一つの現象を大事にすることは、真理に近づく道を開くことになるはずだ。

フロイトやユングは精神に異常を来した人間を研究して、人間の精神や心の在り方の真理に迫った。正常な人間を研究してはこうした成果は生まれなかっただろう。即ち、極端に外れたデータの追求が意外な真理に導いてくれる好例と言える。こんなところにも、現象に対して謙虚になることの大切さが見て取れる。

科学の草創期に自然科学者たちが持っていた姿勢にも、現象に対して謙虚になることの大切さが見えている。彼らは自然現象も含めて身の回りに起こる現象を具に観察していた。これまでに先人たちから教えられたことと異なる現象に出会った時でも、それを否定することはなかった。

自分の目の前で起きていることに、彼らは驚きと好奇心を持って向き合った。何故それが起きているかを知ろうとして考え、さらなる観察を重ねて真理に近づこうとした。現象に対してこうした姿勢を持った多くの科学者たちの思考と行動の積み重ねの上に現代科学は確立したと言える。

このようにして確立した現代科学は、今や一つの枠組みとなっている。この枠組みは信頼性が高いものではあるが、これに盲従する訳にはいかないのである。即ち、以上のようにして確立した現代科学の枠組みも、その確立過程で真理への接近に努めた科学者たちの姿勢、即ち“現象に対して謙虚になる”姿勢と合わせて使う必要があるのだ。

現象に直接向き合う思考の仕方とはおおよそ以上のようなものだ。自分が身に付けた思考の枠組みを捨て去るのではなく、一旦脇に置いて現象そのものに直接向き合うというところが重要だ。枠組みを一旦脇に置くことによって、全ての現象を均等に感じ取ろうとする心の状態が生まれ、感じ取った現象群が表現している意味を掴みにいこうとする思考の基盤が生成される。

こうした心の状態や思考の基盤の上では、現象を取捨選択しようとする意図は働きにくい。できるだけ多くの現象を感じ取り、単独の現象を解釈するのではなく、現象群を全体的に捉えて、それが表現する意味を察知しようとする姿勢が優位になる。

こうした思考の仕方から生まれてくるもの、現象群が表現する意味として捉えられたもの、それが仮説である。この仮説は、単に直観によって提示された仮説や、何らかの意図で選定された枠組みを通して得られた仮説などよりも、妥当性の高いものとなるだろう。

今の時代に有力な思考法となっているものの一つに「仮説一検証」思考と呼ばれるものがある。科学上の発見の多くはこの思考法によってもたらされている。この思考法はその有用性が認識され、科学以外にも活用されるようになっている。デカルトが自著の方法序説で主張していたのもこの思考法だ。当時は論敵から循環論法だとの批判も浴びていたが、歴史がデカルトの正当性を証明したようだ。

仮説一検証思考で重要なのは、適切な仮説を立てることだ。適切な仮説が得られれば仮説一検証の繰り返し回数が少なくなり、短い期間で容易に真理や真実に近づくことができる。検証の手段としては、これまでに確立された多くの枠組みが有効に活用できる。

真理や真実の探求にも、私たちを取り巻く現代社会の問題を解決するためにも、以上に説明してきたような、現象に直接向き合う思考の仕方こそが重要なのである。